

古松崇志著

『ユーラシア東方の多極共存時代』

——大モンゴル以前——

船 田 善 之

文字どおりの待望の大作が出た。著者の古松崇志は、ユーラシア東方史、とりわけ一〇～一三世紀（『中国史』風にいえば遼宋金元代）の王朝間関係を専門とする。すでに、一般向けの書籍として著された『草原の制覇—大モンゴルまで』（岩波書店、二〇二〇）、複数の共編著及び多くの論文によって、当該分野を代表する研究者として知られている。総頁数八〇〇頁を超える本書は、著者が二〇〇三年以来発表してきた諸論文をベースに、新たに書き下ろした章も加えて再構成したものである。著者の研究を専著によって体系的に通読できるようになったことを喜ぶたい^①。本書は、次のように三部一三章に序章・終章を加えて構成される。

序章	ユーラシア東方の多極共存時代とは何か—問題の所在—
第一部	一〇～一三世紀のユーラシア東方における王朝間関係
第一章	契丹・北宋間の澶淵体制と国境
第二章	契丹・北宋間における外交文書としての牒
第三章	契丹・北宋間の国信使と儀礼
第四章	金・北宋間の同盟をめぐる—外交交渉と儀礼を中心に

第五章 金国の正旦・聖節の儀礼と外国使節

第二部 契丹・金の儀礼と信仰

第六章 契丹の王権儀礼と信仰—即位儀礼・天地祭祀・喪葬儀礼をめぐる—

第七章 契丹皇帝の喪葬儀礼—聖宗文殊奴の喪葬儀礼と慶陵埋葬を中心—

第八章 慶州白塔建立の謎をさぐる—契丹皇太后・皇帝の仏教信仰—

第九章 法均と燕京馬鞍山の菩薩戒壇—契丹における菩薩戒の流行—

第一〇章 金国の祭天儀礼—拜天と郊祀をめぐる—

第十一章 金国の祖先祭祀—御容祭祀と宗廟—

第三部 多極共存時代の歴史編纂

第十二章 女真開国伝説の形成—『金史』世紀をめぐる—

第十三章 脩端「辯遼宋金正統」をめぐる—元代における

『遼史』『金史』『宋史』三史編纂の過程—

終章 一〇～一三世紀のユーラシア東方史—時代史の概観—

まず、章ごとに若干のコメントを加えつつ、本書の概要をみていこう。序章は、本書における「歴史地域枠組」として設定される「ユーラシア東方史」の説明から始まる。おおよそパミール高原以東を想定し、中央ユーラシア史と中国史あるいは東アジア史の双方を偏りなく視野に入れて統合するために設定したと述べる。次に、ユーラシア東方における王朝間関係史の研究史が概観され

る。日本・中国・欧米・台湾における動向が過不足なく整理され、極めて行き届いた導論を兼ねる。その上で本書のねらいと構成が示される。

王朝間関係を主題とする第一部は五つの章からなる。第一章は、本書の重要なキーワードである「澶淵体制」について、契丹・北宋の国境から考察する。その初出は二〇〇七年であり、本書所収論文のうち最初の公刊ではないが、本書の構想の出発点に位置づけられる重要な論文である。著者は、澶淵の盟でかわされた誓書の内容と形式から、それを「対等な政権間に結ばれる平和条約の一種」とみなし、国境の遵守など平和維持のための規定や、歳幣・外交儀礼・管理貿易、君主間の擬制的親族関係など、「両国が対等な王朝として共存するための仕組み」を澶淵体制と呼ぶ（本書、三一―三二頁）。そして、国境に関する地理条件、形態、管理制度や、人・モノ・情報が越境する実態を論じる。第二章は、契丹・北宋間における外交文書としての牒に焦点を当てる。時代を問わず、ユーラシア東方における国際関係が論じられる際、致書形式などの国書がしばしば組上に載せられてきた。その型式や文言は、確かに国際秩序とそれを支える理念を検討するのにはきわめて有効だが、ある意味観念的であり、外交の実態や現場を理解することにつながりにくい。実務的な外交がなされる牒の分析を通じてこの問題を克服する。外交史のみならず文書制度史においても重要な成果である。第三章は、契丹・北宋間における使節とその儀礼を論じる。両国の使節がその旅程で受けた接待と相手国の朝廷における朝見・朝辞儀の儀礼の詳細を検討することにより、それらが両国の対等な関係を公式に演出する役割を果たして

いたことも確認される。契丹朝廷における儀礼の地点と空間や服装の分析によって導かれる、契丹・北宋間の使節の往来とその制度が、中国王朝・遊牧王朝双方にわたる複合的な要素から構築されていたとの結論は重要な成果である。第四章は、金と北宋が接触して以降の同盟をめぐる外交交渉と儀礼が取り上げられる。契丹・金間の和平交渉も含め、契丹から金へ覇権が移行するおよそ十年の激動期における、外交交渉の過程と金国の外交儀礼に関する制度が固まっていく状況を克明に跡づける。第五章は、金国の元日と皇帝の誕生日の儀礼、とりわけ外国使節との対面儀礼を中心に検討することにより、金の政治体制と外交関係が連動して展開していたことが明確にされる。南宋のみならず、斉・高麗・西夏を包摂した議論は、まさに本書が掲げる「多極共存時代」の特徴を浮き彫りにすることに成功している。

儀礼と信仰に焦点を当てる第二部は六つの章からなる。第六章は、即位・天地祭祀・喪葬の儀礼の検討から契丹の支配体制と王権の特質に迫る。いずれも契丹の古くからの習俗、すなわち基層信仰としてのシャマニズムにもとづく儀礼であることが確認される。ただし、喪葬については、唐制の模倣と仏教儀礼としての追善供養の実施がみられること、しかしながら、シャマニズムと仏教とは混淆しなかったことなど、重要な論点も提示される。第七章は、慶陵の考古資料と文献史料を併用して、聖宗文殊奴の喪葬儀礼を詳細に検討する。論点は多岐にわたるが、以下の論証は、さわめて重要かつ示唆的である。すなわち、喪葬儀礼について、史料に現れる漢語語彙を一見すると、それは唐制、すなわち儒教の礼制に基づいているようにみえるが、それらの語彙は借用され

たものに過ぎず、儀礼の方法は契丹の風習に基づくというものである。第八章は、慶州白塔を事例に、契丹皇太后・皇帝の仏教信仰を考察する。一九八八年から一九九二年におこなわれた解体修理にもなつて、新たに発見された二通の建塔碑、法舍利塔、仏典『無垢浄光大陀羅尼經』なども活用し、慶州白塔建立の中心的な目的が、章聖皇太后と皇帝夷不董による先代皇帝に対する追善供養であつたことを解明する。第九章は、戒台寺に現存する碑刻の分析を通じ、契丹治下の高僧法均が開いた馬鞍山の菩薩戒壇と当時の菩薩戒の流行から、政權と社会における仏教の位置を考察する。契丹皇帝と菩薩戒師の協力関係が菩薩戒の流行を促進し、政權と仏教界の結びつきを強化したことが活写される。さらに、菩薩戒受戒熱は宋や西夏といった国外まで波及したことが論じられる。国境を越える参詣者の存在をめぐる議論は、第一章とも連動して、当時の国境の状況を考える上でも興味深い。契丹皇帝の金泥御書による戒本が歴代の高僧に継受され、政權・仏教界の結びつきが金・モンゴル時代へと継承されたとする指摘も重要である。第一〇章は、金国における二種の祭天儀礼を検討する。第一は、女真人伝統の「拜天」であり、一般に不定期におこなわれる遊牧王朝の祭天儀礼と異なり、定期的な年中行事であつたことなどがその特徴であることが指摘される。そして、射柳・擊毬という騎馬による武芸の挙行にみられるように騎馬狩獵民の性格が濃く、さらにそれは民衆も観覧することができる開放性を備えていた。第二は、中原王朝の伝統である儒教式の「郊祀」であり、世宗期に導入された。女真の君主にとっては、両者とも祭祀の対象は天であり、その違いは方法に過ぎなかつた。そのため、前者で

十分であつたが、世宗が内外の危機を乗り越えたことを契機として後者も導入したものの、その受容は部分的なものだつたと評価する。そして、『金史』礼志の冒頭で郊祀が王朝儀礼の中心であるような叙述について、後世の元代の史官によって造り上げられたものとみなす。この鋭い指摘は、非漢人を君主とする王朝に関する正史などの叙述をいかに解釈するかが重要であることを知らしめる。第一章は、金国における二種の祖先祭祀を検討する。第一は、祖先の肖像（御容）を用いる祭祀で、太祖阿骨打没後に始まつた。それは、陵墓の祭殿とは別の御容などに建設された太祖廟でおこなわれ、以降金国の祖先祭祀の中核をなした。第二は、木製の位牌を祭る宗廟（太廟）においておこなわれる、中原王朝の儒教の礼制にもとづく祭祀である。前者は、初期には契丹の酒食を焼いて供える焼飯の継承がみられるのが特徴で、上京建設後には城内の慶元宮に阿骨打の御容が祭られ、宋制に倣つて原廟と呼び、さらに中都遷都の頃から宋制同様常食を供える方式に変化したという。三代皇帝熙宗合刺の治世初期に制度設計された後者は、その後の皇統継承と政変の影響を受けながら展開した。総じて、契丹の制度の模倣から中原王朝の礼制へ傾斜していく傾向が認められる一方で、金国の独自性も確認できるとする。

歴史編纂をテーマに据える第三部は、二章から成る。第二章は、『金史』世紀の文献学的研究から女真の始祖説話の形成と金国の王朝建設を論じる。阿骨打の金国の急激な勢力拡大により、広大な地域に分散居住していた女真系集団をまとめあげる伝承が形成され、いわゆる「女真人」意識が王朝建設のツールとなつたと主張する。そして、始祖説話の形成過程は、阿骨打期の宗翰に

よる老人からの聴き取り、太宗呉乞買期の開国史編纂事業、熙宗合剌期の『祖宗実録』の献上という三段階を経ており、その第一段階が記憶から記録へ移行する重要なメルクマールであったと説く。第三章は、脩端「辯遼宋金正統」の精緻な分析と広汎な関連史料の渉獵に基づき、元代の『遼史』『金史』『宋史』編纂に至る過程を解明する。そして、大元ウルスによる正史編纂が元末まで遲滞した要因を正統論争やモンゴル支配層の正史編纂への無関心に求める通説を批判し、大元ウルス政権が当初から構想していた三史編纂の基本方針は、正統論争によって揺らぐことはなかったと結論づける。五代以来の分裂期の史観と華夷・正閏をめぐる正統論は存在したが、遼・金・北宋・南宋の歴史を編纂すべきとする脩端の主張は、北の契丹・金国が南の五代・北宋・南宋に対して優勢に立ちつつ併存するという歴史の現実を公平に判断した立場からなされており、それは大元ウルスの方針やそれを支えた史官たちの意向とも合致していたとする解釈は説得力を有する。

本書を総括する終章は、一〇―一三世紀のユーラシア東方史について、王朝間関係や国際情勢を中心に概述するとともに、総括と展望を提示する。契丹・北宋が相互に相手君主を天子・皇帝として承認することによる対等関係の画期性に加え、両者の自己認識にも議論は及び、契丹が「中華」としての自意識を包摂することなど重要な論点が提示される。最後に、中央ユーラシア史ないし内陸アジア史や海域史まで視野を広げて、多国体制を検討し、ユーラシア東方史を総括することが課題として提示される。

本書の各章のほとんどは、著者がすでに刊行した論文に基づい

ている。これらに全面的な新稿としての第四章と第一章を加え、一部の章は、複数の論文を組み直し、さらに各章に改訂を施している。結果として、本書は、対象とする諸王朝の相互関係、それらの外交・儀礼・信仰及び歴史叙述について、中核的な課題を網羅して練り上げられている。著者が本研究を構想して以来、一貫した問題関心の下で、適切に設定した諸課題に取り組んできた賜物であろう。

本書を貫く特徴は、著者の博覧強記に由来する、幅広い先行研究への目配りと、多種多様な史料の活用、徹底的な文献学的手法に基づく精緻な論証である。一八〇頁にわたる注と三三頁にわたる参考文献の読者を圧倒する分量は、このことを端的に示す。本文・注の各所にみられる史料の博引旁証は、考証学を彷彿させるこれらの論証の堅実さと、漢籍とその版本に対する著者の造詣の深さには感服を禁じ得ない。

本書の第二の特徴は、依拠する史料の大半が宋側の漢語史料でありながら、中国中心的な歴史の見方を相対化し、宋王朝中心に捉えられてきた、一〇―一三世紀のユーラシア東方における国際関係の歴史像を大きく書き換えることに成功したことである。そのバランスのとれた分析は、漢語史料の癖を踏まえた上で、建前の言説や漢文化による解釈に引きつけた叙述の本質を見抜く手腕にも裏づけられる（本書、三一〇―三一、四二六頁など）。

第三の特徴として、実証的な論証とその結論に基づいて、より大きな枠組みの議論に寄与することを試みている点が挙げられる。すなわち、当該時期の国際秩序の特徴を浮かび上がらせるとともに、それを世界史上における国際秩序の普遍性の中に位置づける

ことを試みている。日本史・西洋史も含めて、広く歴史学研究者に読まれるべき專著である。評者の研究領域であるモンゴル時代からみても、各所にその時代への影響が論じられる。それらの論点には、個別の論文の中核になるような知見が含まれており、モンゴル帝国・大元ウルス研究への貢献は大きい(本書、九五、三九二、四〇四、四五七〜四五八頁、及び第一章など)。

以上のように、本書は、研究史上重要な価値を有する專著と評価することができる。率直に言って、この重厚な成果に対して批判を加えることは、評者の能力に余る。望蜀の言を以て書評の責を塞ぐことを諒解されたい。

「瀟淵体制」とそれを継承する多国体制によって維持された「多極共存時代」が、本書の提示するユーラシア東方における一〇〜一三世紀の時代像である。ただし、これが、序章においても提示される、一九七〇〜八〇年代の欧米や台湾の研究によって提唱された「多国体制」「盟約の時代」といった国際秩序や時代像(本書、一一〜一五頁)と如何に異なるのかは、必ずしも明確に説明されていないように思われる。もちろん、本書では、それぞれの盟約の詳細やそれらの歴史的経緯、外交の場における儀礼と格式、契丹・金の祭祀・儀礼など、関連する多岐にわたる問題について、その解像度を極めて精緻なものとした。さらに、これまでのしばしば宋を中心として理解されてきた見方を大きく刷新することに成功している。他方で、視点が契丹・金国に偏らないよう留意されている。本書の成果と新たな視点は疑いないが、これまでの「多国体制」「盟約の時代」といった理解との差分を終

章で明示的に列挙してはしなかったところである。

このことに関連して述べると、本書の議論は、契丹と北宋、金国と南宋という二つの二国間関係に焦点を当てて展開されている。そのため、多極共存時代のユーラシア東方の歴史について、遊牧民・狩猟民の王朝と中国王朝とを二項対立的に理解する視座を讀者に提供する可能性がある。帯に掲げられるコピー「遊牧王朝と中国王朝 なぜ数百年間も併存できたのか」は、著者の発案ではないと思われるが、これに国際関係を考える上での難しさが集約されているように思われる。もちろん、本書が設定した課題に取り組むためには、この二つの二国間関係の検討から着手するのは定石であり、かつ残存する史料からみても妥当なアプローチである。加えて、西夏・高麗・斉も含めて多角的な議論もなされているのは、「多極共存」をタイトルに掲げる著者の面目躍如たるところである。ただし、本書から得られる多極共存の中核は、前半が契丹・北宋、後半が金・南宋という二大国の関係が国際秩序を規定したというものである。すなわち、二大国が主軸となって構築した国際秩序が、西夏・高麗など近隣の中小の諸王朝に波及し、西夏・高麗などはいわゆる「瀟淵体制」を受動的に受容する立場であったという印象を抱かざるをえないのである。

また、「瀟淵体制」の画期性の一つに、名分としての対等、すなわち双方を天子・皇帝と認め合うことが挙げられる。これは、他の時代にはない大きな特徴である。著者が「分裂時代」ではなく「多極共存時代」と称す所以であろう。この対等性が歴史的にどのような意味をもつか、共存の持続にどのように作用したのか、さらに議論を深化させてはしなかったところである。他方で、著者

は、総じて軍事的に優勢であった契丹・金国が主導権を握っていたという解釈を示す。評者もその解釈が妥当だと考えるが、そうであるならば、名分としての対等が選択された要因も知りたいところである。対等関係はあくまでも名分であって、一時期の金国や他の時代において選択された上下関係と実質的な違いはないのであろうか。あるいは、そのときどきの軍事力や内政・財政の事情に影響され、双方の固執と譲歩とによって偶発的に選択された結果なのであろうか。

また、第Ⅲ部については、著者自身が「あとがき」において「内容が中途半端」と説明している（本書、七六三頁）が、二つの章ともに高質な論考である。むしろ、これらは本書に収録するのではなく、歴史編纂を主たるテーマとする専著として、今後の研究とあわせて別にまとめた方がよかったように思う。以上、本書はほとんど非の打ち所のない内容であるため、ないものねだりの指摘に終始したことを海容いただきたい。

最後に、本書を優れた専著たらしめるもう一つの要素として、著者の柔軟な研究姿勢についても言及したい。著者自身も述べるように、本書に関わる研究分野は、著者が関連する論文を公表した前後より現在に至るまで大きく展開した。著者は、その後公刊した論文においても、本書においても、他の研究者が提示した議論や成果を極めて謙虚かつ適切に吟味・検討した上で、自身の研究に反映させている。例えば、「ユーラシア東方」という地域については、さまざまな論者が「東ユーラシア」「ユーラシア東部」「東部ユーラシア」などをそれぞれの文脈で使用し、さらに

はこれらの地域区分自体の妥当性にも少なからぬ批判が寄せられた^③。評者は、著者の研究対象とそのテーマとして、この地域概念の範囲はきわめて妥当と受け止めていた。その一方で、著者を含め、多くの論者がおおむねパミール以東に限定することについては、モンゴル帝国史・中央ユーラシア史の観点から、パミール高原以西を切り捨てることへの違和感もあった。これについては、荒川正晴がパミール以西の西トルキスタンからインドに至る地域も重要な構成要素として包摂することを提案したが、著者も堅い輪郭を想定するものではないとして、モンゴリア・東トルキスタンとのかかわりを踏まえて西トルキスタンまで射程に入れる荒川の提案を是としている（本書、四頁、五八一頁注一三）。

第Ⅰ部の中核となる「澶淵体制」についても、第一章の基となった論文の初出時からその定義に補訂を施している（本書、五五八―五五九頁）。そして、澶淵の盟の起源を雲中会盟に求める毛利英介や、「澶淵体制」の枠組みを維持しつつも君臣関係を構築した金国の国際秩序への志向を看取した井黒忍らの成果も踏まえて、自説に微修正や補足を施す（本書、五五六―五五七、五六七頁）とともに、さらに新たな研究へと昇華させている（本書、第四、五章など）。著者の当初の構想が妥当であったからこそ、いわばインタープレイのようにそれぞれの研究が相互に共鳴してきたといってもよい。これに加え、著者の学界動向への丁寧な目配りと、他者の研究の価値を適確に見極める能力とが、初出時すでに高質であった原載論文をより高い水準に引き上げたことみなすことができる。著者の実直な研究のさらなる成果に期待して本書評を結びたい。

① 本書の書評として、すでに以下の二本が刊行されている。あわせて参照されたい。渡辺健哉「書評 古松崇志著『ユーラシア東方の多極共存時代―大モンゴル以前』」《文明動態学》四、二〇二五、二八七―二九三頁、毛利英介「書評 古松崇志著『ユーラシア東方の多極共存時代―大モンゴル以前』」《歴史評論》九〇一、二〇二五、八〇―八四頁。

② もちろん、著者がそのように言明しているわけではなく、あくまでも読者側の印象に過ぎない。著者は極めて慎重に相対的な見解を提示しようとしていることを補足しておきたい。また、西夏・高麗からみた当時の国際秩序のあり方は、西夏史・高麗史の立場から検討されるべき課題かもしれない。なお、高麗史については、豊島悠果によって重要な成果が出されている。豊島悠果「一一一六年入宋高麗使節の体験―外交と文化交流の現場―」《朝鮮学報》二二〇、二〇〇九、一―五五頁、「宋外交における高麗の位置付け―国書上の礼遇の検討と相対化―」(平田茂樹・遠藤隆俊編『外交資料から十―十四世紀を探る』汲古書院、二〇一三、一四一―一七〇頁)、「金朝の外交制度と高麗使節―二〇四年賀正使節行程の復元試案―」《東洋史研究》七三―一、二〇一四、三三―六七頁)など。豊島には『高麗王朝の儀礼と中国』(汲古書院、二〇一七)を始めとして祖先祭祀や儀礼に関する成果も多い。

③ この地域区分をめぐる視座と議論ならびに論者間の齟齬を整理したものとして、伊藤一馬「『東部ユーラシア』の現在」《神女大史学》四〇、二〇二三、五三―八一頁)を参照。

④ 荒川正晴「中華世界の再編とユーラシア東部」(荒川正晴ほか編『中華世界の再編とユーラシア東部 四―六世紀』岩波講座世界歴史六、岩波書店、二〇二二、三―七七頁)。荒川がその後発表した下記も参照。荒川正晴「ユーラシア東部論再考―『世界』の一体化への胎

動を如何に考えるか―」《史学研究》三二八、二〇二四、一―二九頁)。

⑤ 毛利英介「澶淵の盟の歴史的背景―雲中の会盟から澶淵の盟へ―」《史林》八九―三、二〇〇六、七五―一〇五頁)。

⑥ 井黒忍「金初の外交史料に見るユーラシア東方の国際関係―『大金弔伐録』の検討を中心に―」(荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉編『遼金西夏史研究の現在』三、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇一〇、三一―四五頁)。

(A5判、口絵四頁+x+七六五+五四頁、名古屋大学出版会

二〇二四年二月、税込一四三〇〇円)

(広島大学大学院人間社会科学科准教授)

[附記] 本研究はJSPS科研費JP23K25354、JP24H

00097の助成を受けたものである。